



鎮守の森だより

NPO 法人社叢学会ニュース

第 21 号

2006 年 5 月 1 2 日

「鎮守の森の伝統と課題」を語る

基調講演 / 山折哲雄

5 月 27 日 太宰府天満宮で平成 18 年度総会開催

5 月 27 日(土)に太宰府天満宮余香典ホールで開催される今年の年次総会・大会の概要が下記の通り決まりました。参加希望者は 5 月 23 日までに事務局へ葉書(〒604-8115 京都市中京区雁金町 373 番地 みよいビル 303 号)、FAX(075-212-2916)、メール(shasou@ams.odn.ne.jp)でご連絡下さい。また懇親会(会費 3 千円)出席希望者はその旨、ご記入下さい。なお、正会員で欠席の方は必ず委任状をお送り下さい。

時	内 容・講 師	
10:00 ~ 10:45	年次総会	
11:00 ~ 12:30	研究発表会 「2000 年の森」を目指して ～加紫久利神社の社叢とその設計理念～ 社寺林が都市の快適性に及ぼす影響 ～名古屋市千種区城山風致地区の事例～ 太宰府天満宮の奥にある宝満山の 『竈門山水帳』にみる江戸期の山林管理について	発表者 椎原晩聲 岡村 穰 森 弘子
12:30 ~ 13:30	昼食	
13:30 ~ 14:30	基調講演 「鎮守の森の伝統と課題」～続・鎮守の森は泣いている～ 山折哲雄(国際日本文化研究センター名誉教授・宗教学者)	
14:40 ~ 16:30	パネルディスカッション パネリスト： 矢幡久(九州大学教授) 飯沼賢司(別府大学教授) 上田昌弘(鎮守の森の会主宰・社叢学会正会員) 糸谷正俊(社叢学会理事) コーディネーター：岡村穰(名古屋市立大学教授・社叢学会理事)	
17:00 ~ 19:00	懇親会 ～二日市温泉「大観荘」～	

伝統文化の見直し～繋がれた世界～

講師 神部四郎次(修成建設専門学校 特担講師)

はじめに 伝統文化というのは古代から江戸時代までで、明治以来の近代化は西洋文明そのままの移入であった。そしてまた2千年に及ぶ日本の伝統文化の切捨てでもあった。しかし、今日の世界は、その物質文明である西洋文明のみでは破綻しつつあることも気づき始めた。そこで、日本の伝統文化・精神文化をもとに、生物の世界と日本庭園の世界を見直して見たい。

森は一体の巨大な生き物 まず、「森は一体の巨大な生物」と提示したが、森は本当に巨大な生き物なのか？ 熱帯の森に本格的に取り組みはじめたのは、1996年6月5日付け朝日新聞掲載の「熱帯雨林の花 咲いた」というタイトルで、マレーシア・サラワク州の熱帯雨林で高木の一斉開花が続いているという記事だった。この内容は、単に東南アジアの熱帯雨林で花が咲いたというだけでなく、5,6年毎に地上70メートルの高さで「一斉開花」したということに注目した。日本のスギやヒノキは高くてもせいぜい30mくらいで、アフリカや南米の熱帯雨林でも40mくらいである。「一斉開花」というのは、約500種目の樹木の花が2～3ヶ月の間に開花することらしい。この調査は、京都大学生態学センターの井上民二教授が中心となり、東南アジアの熱帯雨林の地上40mから70mの高さの樹木を観察するようになってから初めて明らかにされた。

一斉開花したのはフタバガキ科の高木で、早朝5時ごろに開花する。この花を求めて体長2cmのオオミツバチがやってくるが、このハチは他のハチより先に花粉を集めるために、偵察隊が薄明の中を飛びまわり、花を見つけると大部隊を引き連れてきて、夜明けまでに花粉を先取りしてしまう。自然は競争原理で動いているが、競争を基本に非常に高度で複雑な共生の社会が熱帯の森を形成している。共生だけでなく、一斉開花するということなので、森全体がひとつの行動をし、人間社会よりも複雑で高度な社会が森にあると思う。熱帯雨林の一斉開花については、井上民二氏の著書『生命の宝庫・熱帯雨林』(NHKライブラリー)が解りやすい。

京都の貴船に根と根が重なり合った状態の「根の道」がある。京都の北山の森は相生の森というかたちで、お互いに地下の根が続いているのではないかと思う。ここだけに限らず森とはそのようなもので

はないかと思う。従来の森の研究はほとんど地上部が多く、このように森の木々の根と根が重なり合っている状態の研究はされていなかった。ところが50年ほど前の論文により、杉の根と根が森の中で接合し、養分が行き来していることが分かった。共生という観点から、杉だけでなくケヤキなどあらゆる樹木の土壌の下で、互いに養分が行き来しているのではないかと推察できる。

10年ほど前から菌根菌というキノコと根の関係が話題になっている。これは菌糸を通じて種々の木の根が一緒になっているという研究で、「森の地中に縦横に走る菌糸が森の木々を結んでいる」と記されている。そこで、世界で一番大きな生物は何かと考えた時、キノコ(菌糸)が結んでいる森であると記されていたように思う。キノコを研究している人は、一つの生物体としてそのような発想を持っていたようだ。因みに、菌は地球をとりまく五つの生物界の一つで、動物界・植物界・モネラ界・原生生物界・菌界を五界という。

伝統の日本庭園 古代から江戸時代までが日本文化を背景にした伝統の日本庭園があるといえる。伝統の庭園には神仏が遊びたもうた。庭に心があり、思想があったのである。明治維新以降の日本庭園と称する庭には思想がなくなっている。そこには西洋文化の物質合理思考のみがあって、伝統の精神文化はなくしてしまった。例えば、作庭中の現場で、燈籠や蹲踞(つくばい)の設置意図を聞くと、「飾りのため」と答える始末。燈籠はもともと社寺の献灯用として製作されたもので、それを庭に設置することは神仏と直結していたのではないかと思う。蹲踞についても、ただ単に水を汲んで手を洗うだけではない。社寺における手水鉢は清めのための重要な施設であった。

江戸時代の庭園については『築山庭造傳』という作庭書があり、「庭造傳叙」に庭を造るのには何が一番大切かということを書いている。それによると、諸神仏が遊びたまえる清浄な庭で、子々孫々まで繁栄できる庭を造ることと記している。庭の極意はまさにこの本ではないかと思う。庭も森も自然である。自然をよく知っていないと、庭も森も理解できない。

屋敷神とその御神木の諸相

- 岩手県旧宮守村上宮守集落から -

講師 芦田一夫 (全国農業共済協会農政部長兼出版制作室長)
コメンタ 茂木 栄 (國學院大學助教授 社叢学会理事)

はじめに 一般的に家の氏・祖先、地所、農耕等に係わる「家の神」信仰については、「屋敷神」が学術用語とされている。屋敷神信仰は、最も身近な基層の神信仰と考える。また古来、日本人は特定の樹木には神が降臨・憑依・霊が籠もるとして、それを御神木としてきた。岩手県旧宮守村上宮守集落(現遠野市宮守町)の屋敷神の形態は、鳥居を供え大人が数名座れる一間造りのお社、小さな祠(木製・石づくり)の祠等がある。そして必ずと言っていいほど数種の樹木が御神木として存在する。これらの御神木は、もちろん社叢(鎮守の森)ではない。しかし、かと言って単なる樹木(立ち木)ではなく「鎮守の杜」さながらの様相をかもし出している。また、同村の「巨樹・名木」等の天然記念物・保護指定されている御神木も数多い。調査の中で、屋敷神とその御神木は「日本の木・森の文化」を考える一例にもなるのではないかと、との仮説を立てた。なお、屋敷神そのものも存在は文章では理解しにくい面もあり、発表当日は数点をポストカードにして配布した。

上宮守集落屋敷神とその御神木の諸相・分類 宮守村上宮守集落(144戸)において調査では64例(戸・カ所・別当)を確認した。祀る神々の述べ総合計は、単体の祭神に、複数体の祭神をそれぞれ分解して総合的にみても、「勧請神」であろう稻荷系：15、自然信仰の地神系：10、山神系：8、八幡系：6、熊野系：6、祭神名「不明」12事例。御神木の樹種の構成は、ウッコ=16、サクラ=5、スギ=5、カツラ=3、トチノキ・サワラ・スギとフジ・ウッコとカヤ=各1、その他・不明

=27となっている。なお、ウッコは当地でのイチイ・キャラボクの通称である。

上宮守集落屋敷神の信仰機能の現在学的考察 村人の代表各者に設問したところ「この村が遠野郷、宮守村の他所と比べてもとても貧しく、困った時には、神様に頼る以外になかったからである」との見解で一致した。非常に抽象的だが、全国各地の農村にありがちなことで、この一言に尽きると言っても過言ではないかと考える。また、「何を祀っているのか・自然崇拜(豊作・農耕等) 姓氏(一門・マキ)・先祖崇拜か」の質問に対しては、「地之神」「山之神」等への自然崇拜は理解しやすいが、数組の「マキ神祀り(信仰)」がありながら「先祖崇拜ではない」という意外な見解で一致した。おおよそこれは、先祖崇拜とまでは意識していないが「先祖が伝来大事にしてきたものだから疎かにできない」という捉え方ではないか。このことは当地において、屋敷神と言う表記・耐え方が適切でないのかも知れない。これについては、別途、検討を試みたい。

おわりに 以上のとおり同地においては現代においても屋敷神が数多く存在し、ここ数年、鳥居のみからお社・祠等の修営・造営が活発に行われ、全国的にみて他の土地では放置状態の屋敷神は、同地では現在もその生活者とともに生きていることを確認した。今後、次世代の人々が、どう屋敷神を守っていくのか、さらには御神木の存在を「鎮守の杜」(文化遺産)として捉えていくのが注目されることと考える。

次回予告(第21回関東定例研究会)

日時：2005年7月1日(土) 14:00~17:00
場所：國學院大学・渋谷キャンパス (東京都渋谷区東4-10-28)
テーマ：「日本の庭園とその景観作法」
講師：進士 五十八(東京農業大学教授・社叢学会副理事長)
コメンタ：坂本 新太郎(大阪芸術大学教授・社叢学会理事)

平成 18 年度総会のスケジュールをトップページでも記させて頂きましたが、正会員の方には、総会への出欠葉書を同封させて頂きましたので、5 月 23 日までにご返事を頂きたくお願い申し上げます。

平成 18 年度(平成 18 年 4 月～平成 19 年 3 月)の会費の振込用紙を同封させていただきました。学会活動を円滑に運営するためにも、会費の納入をよろしくお願い致します。会費納入を確認でき次第、平成 18 年度の会員証をご送付させていただきます。

かねてより社叢インストラクター養成講座を開催してきましたが、この度、「社叢インストラクター資格制度の概要(案)」が決まり、来る 5 月 27 日の総会の席上で発表させていただきます。

この度、当学会副理事長の進士五十八氏(東京農業大学地域環境科学部造園科学科教授)が「日本庭園の特質に関する研究」で、農学分野の優れた研究を顕彰する「読売農学賞」を受賞されました。進士氏は「日本庭園には、農業由来の実用性と、美観の調和がある」。庭園に込められた日本の知恵を都市設計にも生かそうと、「農」の思想を踏まえた街づくりを提唱されています。

パソコンが壊れた！ 博覧会が終わった今となつては事務局に 2 台もいない…。でも、2 人で 1 台はちょっと不便。だましまし遣っている自宅パソコンの買い替えを考えていたところだったので、この際！ 清水の舞台から飛び降りるつもりで！ 新しいのを買って、しばらくは事務所で使うことにした。このパソコン、某国産有名企業のなんだけど、ふたの部分がオレンジ色！「売れるつもりで作らしたん？」「だから安いんですわ」「あ、そ」。

てなわけで、会員の皆さまに一斉に Mail を送れるように作ったグループ登録が消滅、殆どの部分は復旧できたのだけれど、一部は消えちゃったみたい。「今まで Mail が届いていたのに、届かなくなった！」という方は、ぜひ事務局宛てに Mail をお送り下さい！

なお、事務局では会員の皆さま方のご住所や Mail アドレスをパソコンに保管しておりますが、ウィニーを始めとするファイル交換ソフトは読み込んでおりません。また、自宅のパソコンにもこれらのソフトは読み込んでおりません(自宅で仕事をするほど仕事熱心じゃないからデータを持って帰ることもないしなあ…)が、情報の取り扱いには慎重を期してまいりますので、よろしくご了承下さいますようお願い申し上げます。

(藤岡 郁)

追加... 愛・地球博「千年の森」東屋で上映いたしましたハイビジョン映像作品「日本は森の国」(DVD2 枚+BGMCD1 枚)を会員の皆さま方に、1 セット 8,000 円でお頒けしています。ご希望の節は事務局までご連絡下さい。

原稿募集！

『社叢学研究』(第 5 号)への投稿：従来どおり論文、研究ノート、資料紹介や調査報告(各 400 字詰原稿用紙 40 枚以内)のほかに、会員通信「鎮守の森の活動報告」を募集します(下記参照)。今年度の投稿締切りは、いずれも 11 月 30 日(木)必着。

「鎮守の森の活動報告」：祭り、音楽会、問題点など。B5 判 1200 字。横書き。手書き、ワープロ、イラスト、写真入り、いずれも可。

発行人 社叢学会事務局 〒604-8115 京都市中京区蛸薬師通堺町西入雁金町 373 番地
みよいビル 303 号 TEL075-212-2973 FAX 075-212-2916
URL <http://www2.odn.ne.jp/shasou/> E-Mail shasou@ams.odn.ne.jp
社叢学会関東支部 〒101-0031 千代田区東神田 1-8-11 森波ビル 2 F
TEL03-5875-8423 FAX03-5875-8321 E-Mail shasou@macrovision.co.jp